

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和6年度 福島県意見交換会（第3回）議事概要

令和7年2月26日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和7年2月26日（水）15:00～17:00

【場 所】福島復興局 7階 多目的会議室／オンライン（Teams）

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

福島県／福島大学／一般社団法人 ふくしま連携復興センター／株式会社Jヴィレッジ

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 福島復興局

＜事務局＞

株式会社読売エージェンシー／株式会社 JTB

【議事概要】

1 開会

復興庁佐藤参事官より、今年度の成果の共有と来年度以降の活動に向けての参加者の意見を求める旨の挨拶がなされた。

2 各団体の令和6年度活動紹介

復興庁（資料2-1～資料2-4）、福島大学（資料3-1～資料3-2）より令和6年度の実績を紹介した。

3 令和6年度の実績ご報告、および次年度に向けて

事務局より、今年度の実践の場「“ふるさと愛”プロジェクト 福島の過去と未来に会う」、招待状作成ワークショップ、招待状展示イベントの開催結果を説明し、開催内容に対する意見交換、ならびに次年度の実績の方向性についての意見交換が行われた。

＜主な意見＞

- ・今年の「過去と未来に会う」というテーマは、福島の「光」と「影」に置き換えることができるが、やはり両面を見て知ってもらうことが大事だと考える。実際に現地にきてもらい、見てもらい、感じてもらい、考えてもらう機会を作り出すことが重要であり、来年度も継続して実施してほしい。さらに、情報発信の工夫によって付加価値を高めていければ良いのではないかと。
- ・これまでの開催の中ではスムーズに運営されていて、運営委員会の学生も継続参加していて、更に新しい仲間を呼び寄せることが出来ていた。コース設定もエリアを分けることでコンパクトに移動ができた。
- ・これまでのノウハウが活き、これまでの福島とこれからの福島を効果的に見て回ることができた。
- ・語り部の方々から震災や避難生活の話を伺い、その後に地域に移住者が集まっている状況などの話を聞いたのが良かった。フタバスーパーゼロミルでは、案内してくれた若い従業員の方が他県から移住してきた方と、県内から移住してきた方で、双葉を自分たちの新しい故郷にしたいとお話いただいたのが印象的で、そういった意味で参加者には両面を体感してもらう良い機会になった。
- ・ポスターセッションでは、成果物としてポスターを作ったが、体験したことをどのように発信していくのが難しいと感じる。

- ・次年度も“ふるさと愛”プロジェクトのフレームを活用しながら、他の被災地の復興の参考になる情報発信を目指せば良いのだと思う。
- ・例えば能登半島につなげて考えた場合、金沢大学の学生に福島に来てもらい、交流を行うなども考えられると思う。
- ・今回のコース設定では、人に着目していた点が印象的であった。例えば伝承館で語り部をしていただいた横山さんに対して、参加者は伝承館の職員ではなく、横山さんという方をしっかりと認識し理解していた。伝承館の後に見学した請戸小学校は横山さんが通っていた学校であり、語り部の際に当時の話を伺った。参加者達は横山さんの話の内容から、請戸小学校内の地図を見て横山さんの自宅の場所を見つけた。また、展示されていた立体地図の砂浜などには、その場所での思い出やメッセージが記された展示がされており、東日本大震災は浪江町に起きたのではなく、浪江町に暮らしていた人々の暮らしの上に起きたことなのだと参加者達に話をした。今回のコース設定と相まって、いかに人に着目させることが大事かを感じた。
- ・例えば、川内村でジンの蒸留所を立ち上げた大島さん。彼はなぜ川内村でジンを作ることになったのか、作る必要があったのか、そういったことに想像力を働かせて考えることが大事だということを参加者には伝えていきたい。
- ・何をどう考えさせるかというプロセスを、我々は確認しながら信念を持って取り組まなければならない。何をどう考えさせるかという軸を確認しながら取り組むことで、参加者が地域の方々に会った際にイメージーションを働かせて考えることができるのだと思う。
- ・ポスターセッションは、単なるリフレクションのみならば、ポスターに限ったことではない。製作過程で参加者同士が仲間意識を高める点では効果的な方法であるが、考えさせることを軸にした場合、参加者の中でキーワードを出し合って、テーマやコースに沿ったキーワードを選んでレポートやリフレクションシートのような形でまとめた後にグループで掘り下げて全体で議論するような方法でも良いのかと思う。
- ・福島の事例を能登半島の復興に活かそうということを、福島大学と金沢大学の取組として行っている。例えば学び舎ゆめの森のような優れた教育実践を行うことで、若い子育て世代や移住者を呼び込んでいるといった事例を紹介している。
金沢の若い人たちが福島に来て、福島から復興に役立つことを見つけて発信するような内容で実施しても良いかと思う。
- ・福島だけ見ていると、他の被災地に何が役に立つのかということが分かりづらい。例えば能登半島の被災を知る金沢大学の学生を福島に呼んで、福島の学生と共に考えるような企画も良いかと思う。

4 閉会

第3回意見交換会では令和6年度に実施された「“ふるさと愛”プロジェクト」及び「招待状作成ワークショップ」の報告と、次年度に向けた改善点の話し合いを実施した。

今後の災害復興の参考になる官民連携の情報提供・ノウハウ発信の取組みを強化したい。